

ボランティアと語り

矢口 裕 康

Volunteer and Talk

Hiroyasu YAGUCHII

I ボランティアと語り

ボランティアとは何かと、よく聞かれるし自問することがある。そのことを一言で表現すると「語り」ではないか、というのが今辿りついた一つの答えである。人と人とがかかわりあう中にボランティアが成立するということは、一方通行的行為ではなく、応答的行為が出現してくるであろう。まさに「語るお」である。宮崎県では「行っかけ語るおや」と表現する。語るお 話すよりもお互いが一歩ふみこんで語り合う感じがする。

「語るお」のような方言は、そこに住む人々にとっては、地域共通語であり生活語でもある。かわいそうを「もぞなぎい」、恐いを「おじい」と表現する。全国共通語にはないニュアンスを含ませた表現が、方言と言える。このような方言を織りこんで語り伝えられてきた宮崎県の民話に、言葉に障害をもっている人達に対して何か力を発揮できる可能性があるのではないかと、この発想の基始めたのが「語り部教室」であり、「語り部くらぶ」である。およそ十年近く、これらの活動とかかわってきた私としても、この発想が彼らの心をノックし、言葉の面白さ、楽しさをひきだす一つの切っ掛けとなりつつあることは確信している。まさに、宮崎県の地で生き、宮崎の言葉で育ってきた彼らに、宮崎方言で語られる民話は自らの中にある言葉をひきだす力となったのである。

また宮崎県では、「かたる」に「加わる、仲間に入る、混ぜる」の意味あいをもたせて使われている。このことは、かつてお伽噺が語り手と聴き手が同一空間の中で仲間意識をもって交流して成立した世界とつながるものといえる。伽とは、人偏に加わるであるが、宮崎県でも伽を「つれ・相俵・道づれ・話の相手」として使われることにも通じるものである。このような地の言葉、生活語もいきづいている彼らの世界を大切にしながら、語り合う空間としての語り部くらぶをめざしているしだいである。

さて語るを実現するためには聴くが求められてくる。語り手、聴き手とも、いわゆる聞くではなく聴くである。『大修館新漢和辞典』「聞・聴<解字>」では

聞く 音声に耳にうけきくこと

自然にきこえてくる意

に対して

聴く きく意志があって注意してきく意

耳をたてて音声をよく通して十分にききとること

と二種の行為の違いを具体化している。まさに語り部くらぶでめざしている行為も、聴き取る、それも耳、目で観とるを通してのみではなく、心でも受けとめてほしいとの言葉掛けをした上での一空間を、常に実現したいと思っているのである。

II 「語り部くらぶ」とは

語り部くらぶは、1990年4月より1995年までの5年間にわたって活動した語り部教室でおこなってきた中味を継承発展したものである。語り部教室の際は、障害者自立支援センター・ほうれん荘へと集う、言葉に障害をもった人達すべてを対象として行っていた。しかし、語り部くらぶでは、福祉作業所「はにわの会共同作業所」仲間の家（以下、仲間の家と略す）へ参画する仲間達の言葉を探索する場として、活動を行っている。しかし、語り部くらぶのメンバーの中には、以前の語り部教室からかかわっていた3人も参加しており、その仲間達が語り部教室から継続して活動するという結果になったのは、私としてもうれしい出来事の一つであった。語り部教室は、諸事情で5年で一区切となり、この際かってから、この種の活動を仲間の家のプログラムの中にあってもよいとの思いをもっていた森富貴子代表から声をかけてもらい、新生「語り部くらぶ」として始めたしだいである。

語り部くらぶがめざすところは、言語障害を克服訓練する場ではなく、このくらぶへと集う一人ひとりの心（気持ち）を育むことを通して、本人達のもっている言葉を発見、ひきだすことができればと思って活動している。このことを基本として、くらぶ参加者の言葉そのものを育むと共に、言葉を伝える、そしてわかってもらえるためには、どうすればよいのかという気持ち（心）の部分の育むことがあって、その結果として言語障害克服へもつながればと思っている。作業所に通所する仲間達のもっている言葉をひき出し、言葉を使うということは楽しくかつ面白いのだということを培ってゆければ幸いである。そして、このことが、今後仲間達が生活してゆく上で生きてくればとの思いをもった「語り部くらぶ」である。

仲間の家では、通所するメンバーを通所生と呼ぶのではなく、「仲間」と呼びあっている。この呼び方は、森代表の思いあつてであるが、このことが共同作業所の名称にもなっている。この表現は、仲間の家紹介パンフレット中「平成11年度年間行事計画」にも、「仲間たちを中心に、県内の仲間たちと交流しながら、市内の仲間たちと交流し」と、随処に出現してくる。また仲間の家目玉産品の一つ、クッキーのちらしの中にも「わたしたちは、障害のある人も、ない人も、いきいきと暮らせる家づくり、地域づくりをめざしています。」とするメッセージからも、この趣旨をうかがいしることができます。

III 「語り部くらぶ」今までの活動内容

1995年9月29日、仲間の家仲間達の自主参加活動として、「語り部くらぶ」は始まった。しかし、私から森代表へ、日常的に仲間達とかかわるスタッフも、この活動の場においてこそその「語り部くらぶ」ではないかとの提案を試みた。この提案を即うけてもらい、1996年1月24日より第4水曜日

午後13時半から15時までの時間帯を仲間の家定例行事として、通所する仲間達・作業所スタッフ・ボランティア、そして時には見学者も参加しての一時となっている。また1998年10月よりは、毎月第4火曜日午前10時から11半までを定例活動日としている。今までの活動中、素材としてきた詩・紙芝居・大型絵話・クイズ・童話・絵本を一覧にしたのが、資料1<「語り部くらぶ」と素材>である。

資料1 「語り部くらぶ」と素材

実施回数	実施年月日	使用作品名他	実施回数	実施年月日	使用作品名他
1	1995. 9.29	谷川俊太郎詩「どきん」	26	11.26	みんなでトイレ
2	10. 20	コップこっぷこっぷ	27	12.17	まどから☆おくりもの
3	12. 15	かおかおどんなかお	28	1998. 1.28	ネコのおりょうり(紙芝居) 自分の猫えらび命名も
4	1996. 1.24		29	2.25	ネコのたいそう(紙芝居)
5	2.28	谷川俊太郎詩「モグモグ」 「たべてのんででるうた」	30	3.25	ネコのおてがみ(紙芝居)
6	3.27	やさいのおなか	31	4.22	みんなきた
7	4.24	ママあててみて ももたろう	32	5.27	ごめんねこねこちゃん (大型絵話)
8	5.22	うらしまたろう(紙芝居)	33	6.24	モモちゃんとかた目のプー (紙芝居, 童話も)
9	6.26	さるかにがっせん(紙芝居)	34	1998. 7.22	おばけのどろんどろんとぴかぴかのおばけ
10	7.24	ぶくぶくちゃがま(紙芝居) こぶたたんぼぼけつとんぼ	35	8.19	ねこのはなし(クイズ)
11	8.28	ぶたたぬききつねねこ その2	36	9.30	マーくんとおくぶく
12	9.25	ニャーオン・おつきさま (紙芝居)	37	10.27	マーくんとおくぶく かみひこうき
13	10.23	パパお月さまとって このにおいなんのにおい	38	11.24	アフリカのぶくぶく
14	11.27	ぶたたぬききつねねこ ありときりぎりす	39	12.22	十二支のはじまり(二俣英五郎)
15	12.25	十二支のはじまり(赤坂三好)	40	1999. 1.26	自分のねこえらび・命名
16	1997. 1.22	エンとケラとブン	41	2.23	つるのねんがじょう(紙芝居)
17	2.26	やさいのおふろ にんじんさんだ いこんさんごぼうさん(紙芝居)	42	3.23	ブルーナのあいうえお㊦行
18	3.26	みるなのざしき とんち文字クイズ	43	4.27	ブルーナのあいうえお㊧行
19	4.23	みんなうんち	44	5.25	ブルーナのあいうえお㊨行
20	5.22	宮崎県立美術館「ふれあい彫刻 展」へ	45	6.22	ブルーナのあいうえお㊩行
21	6.25	きょうのおべんとうなんだろな	46	7.27	ブルーナのあいうえお㊪行
22	7.23	どこでおひるねしようかな	47	8.24	うさちゃん(紙芝居)
23	8.27	みんなみつけた	48	9.28	
24	9.24	もりのかくれんぼう	49	10.26	ブルーナのあいうえお㊫㊬㊭ ㊮行
25	10.29	どうぶつのかどもたち いろいろどうぶつえん	50	11.16	ブルーナのあいうえお

(詩, 紙芝居, 大型絵話, クイズ, 童話のことわり書きない作品はすべて絵本)

資料2 仲間の家・発声

1. 背筋を伸ばす
2. あごをひいて
3. 肩・腕の力を抜き、
4. 手をひざの上で組む。
5. 母音の口のあけ方にこだわる。



あごを引いて、おなかから声を出しましょう。

- 【ア】…口を まるく 大きく あけて。
- 【イ】…口を よこに。
- 【ウ】…口を 前に つき出して。
- 【エ】…口を 少し 小さく よこに。
- 【オ】…口を 小さく まるく。

その1

あえいう	えおあお	あおぞら	たかい
かけきく	けこかこ	かきねの	こぎく
させしす	せそさそ	かさぶね	ながせ
たてちつ	てとたと	たけざお	たてた
なねにぬ	ねのなの	ななつの	なすび
はへひふ	へほはほ	はまべの	ほぶね
まめみむ	めもまも	まめまき	みてる
やえいゆ	えよやよ	やまゆり	ゆれる
られりる	れろらろ	らくだが	あるく
わえいゆ	えをわを	わなげを	しよう

1997年 6月25日

1998年 3月25日

その2

ありさん	あつまれ	あえいう	えおあお
かにさん	かさこそ	かけきく	けこかこ
さかだち	さかさま	させしす	せそさそ
たのしい	たこあげ	たてちつ	てとたと
ならんで	なわとび	なねにぬ	ねのなの
はなたば	はなびら	はへひふ	へほはほ
まえより	まじめに	まめみむ	めもまも
やっぱり	やさしい	やえいゆ	えよやよ
らくだい	ライオン	られりる	れろらろ
わんぱく	わいわい	わえいう	えおわお
がまん	がんばれ	がげぎぐ	げごがご
ざわざわ	ざぶざぶ	ざぜじず	ぜぞぞぞ
だんだん	たぶたぶ	だでぢづ	でどだど
ばんごう	ばらばら	ばべびぶ	べぼばぼ
パラソル	ばらばら	ばべびぶ	べぼばぼ

1998年 4月22日

1998年 6月22日

その3

あかいえ	あおいえ	あいうえお	+ (A)
かきのき	かくから	かきくけこ	+ (B)
ささのは	ささやく	さしすせそ	+ (C)
たたみを	たたいて	たちつてと	+ (A)
ないもの	なになの	なにぬねの	+ (B)
はるのひ	はなふる	はひふへほ	+ (C)
まめのみ	まめのめ	まみむめも	+ (A)
やみよの	やまゆり	やいゆえよ	+ (B)
らんらん	らくちん	らりるれろ	+ (C)
わいわい	わまわし	わいうえお	+ (A)

1999年 7月27日

- (A) ☆ウイア体操…ウイア ウイア ウイア ウイア ウイア ウイア
- (B) ☆イアウ体操…イアウ イアウ イアウ イアウ イアウ イアウ
- (C) ☆アオウ体操…アオウ アオウ アオウ アオウ アオウ アオウ

毎回、語り部くらぶの始めは、あいうえおの母音等を基調とした言葉を、「背筋をのばし、あごをひいて、肩・腕の力をぬいて、手を膝の上でくみ、息をいっばいすいこんで」と、姿勢を正し腰の底から、長音にての発声練習をすることになっている。思いっきり自分の出せる形の声を発することで、気持ち的にも整えた上で、活動に入っている。(資料2 仲間の家・発声) また、1998年からは、私のカレンダー猫めくりの猫を段ボールにはり、複数の猫から各自気に入った猫を自分の猫として選び、かつ命名もし(資料3 猫・紙飛行機命名参照)という形を導入してみた。仲間達は、声出しを自分の選んだ猫に対しておこなうことで、小さな段ボールであるが、そこに声があつかり自分へも声がかえってくればとの思いをもつての試みである。自分の猫へ言葉を掛けることにより、発声にも楽しみがましたようである。1999年2月までの活動の一端は、資料4(『朝日新聞』宮崎版 1998年10月28日)を参照してほしい。

資料3 猫・紙飛行機命名

猫命名他 年齢他	1998年 猫・命名	1999年 猫・命名	1998年10月27日紙飛行機・命名	
			ジェット機型	プロペラ機型
⑱		みーな		
18		ねこ		
⑲	みなちゃん	たくびー	あんぱんごう	こういちごう
⑳	みみちゃん	たま		
㉑	みーちゃん	つよびー	じえつときごう	つよしごう
△20		しゅう		
△㉒	すず	ぼんすけ	そらごう	ほしごう
22	みーちゃん	ごんた		
㉓	みゆ	しろ		
24	おうどん	のんた	ばあーじにあ、いちごう	ばあーじにあ、にごう
△24	ゆきお		ゆかぼうごう	よこはまばんざいごう
⑳	たまちゃん	こんちゃん	やせごう	ばったごう
36	たま	くろ	ごーくんごう	もりごう
36	きろう	ただ	あめりかごう	とら
36				
△36	およろくん	しろ	さんしゃいんごう	
⑳	あきなちゃん	あきな	さふありごう	ゆのもりばれすごう
△36	やまかたや	ころ	うめみやたつおごう	だいえつごう
㉔	みけ	みいちゃん	ふみぼうごう	だいえつごう
△51		むさし	きららごう	ろくすけごう
△51		ぶーちゃん		
51	みけ			
△55		さくら		
△61	しろ		さくらじまいちごう	さくらじまにごう
△61	おふきさん	しゅんじゅん	さくせすごう	ばいごう
△61				
㉕	くろ	のりたま	せんとうきごう	ぷろぺらごう
			たなべごう	あいあいどりーむごう

⑱数字は年齢をあらわし

○は女性

△はスタッフ、ボランティアをあらわす

資料4 『朝日新聞』宮崎版 1998年10月28日



知的障害児・者らが生活する宮崎市田吉の福祉作業所「はにわの会共同作業所 仲間の家」で二十七日、宮崎女子短大の矢口裕康・助教授（民話学、児童文学論）の主宰する「語り部くらぶ」があった。毎月一回、一時間かけて絵本や紙芝居を読む会で、矢口さんが手弁当で始めてから四年目に入った。「一緒に言葉を考えていく姿勢を大事にしたい」といい、仲間を家のメンバーにも「自分の内面世界が広がったようだ」と好評だ。

（橋田正城）

知的障害者に言葉の世界を

「語り部くらぶ」4年目

口さんに頼み込んで実現した。今回で三十七回になった。表現が豊かになったのが一番の収穫、と喜ぶ。矢口さんは「言葉は言葉だ」と話す。絵本や紙芝居に出てくる選び抜かれた言葉は、胸に直接飛び込む力があるのだという。仲間の家では「先生と生徒と」という形式をとらずに、「くらぶ」としての場を持ち続けたい、と考えている。

集いは発声練習から始まった。「まーじーめーにー」などと、矢口さんが示す紙に書かれた文字をみんなで

読み上げる。「仲間の家」のメンバーは大半が重複障害者で、言葉の不自由な人が多い。「最初におなかから大きな声を出すことが大事」と矢口さんはいう。

今回の絵本は『まーくん とぶくぶく』。主人公が好きなものを自在に大きくできる、という物語だ。紙飛行機を大きくして空を飛ばす様子に、全員が食い入るように入った。特大の紙飛行機で空を飛ばすシーンで、

矢口さんは「紙飛行機を作ろう」と呼びかけた。すかさず、製作の手順が

書かれた絵本を取り出す。みんな紙飛行機を作り、名前を発表しあう。「桜島1号」「ダイエット号」など、自分の故郷や願望を託した名前が多かった。人気歌謡グループにちなんだ名前をつけた女性もいて、周囲は笑いの渦に包まれた。紙飛行機を飛ばして、会は終わった。

「知的障害者は文字や言葉の世界から遠い存在だと思って思われているでしょう。それをなんとかしたかった」と、仲間の家代表の森富貴

子さん（六〇）は話す。会は一九九五年九月、矢

さて、1999年3月よりは、今までの活動体験をふまえて、『ブルーナのあいうえお』（資料5参照）を基本として、「仲間の家あいうえお」を参加者からみつけだしてゆく活動にも取り組んでいる。ブルーナをとりあげたのは、1999年はうさぎ年でもあり、うさこちゃんと命名されたうさぎを主人公とした、たくさんの著作があるゆえである。1999年11月現在、や行まで参加者個々人のあいうえおを見出し、結果として「仲間の家あいうえお」完成をめざした活動も中心軸にすえて行っている。（資料6 『宮崎日日新聞』1999年6月30日参照）

資料5 『ブルーナのあいうえお』と学生たちのアイウエオ

ブルーナの あいうえお	保育科 1年生 (1999 6.24)	幼児教育科 2年生 (1999 7.2)		ブルーナの あいうえお	保育科 1年生 (1999 6.24)	幼児教育科 2年生 (1999 7.2)	
あ□	あり	あし	あり	注② □の□	ゆのみ	えのき	きのこ
い□	いぬ	いす	いぬ	は□	はこ	はね	はり
う□□	うさぎ	うきわ	うさぎ	ひ□□	ひかり	ひよこ	ひなた
え□□□	えんかい	えいこう	えんぴつ	ふ□□□	ふうせん	ふくろう	ふうせん
お□□	おかず	おまる	おんな	注② □□へ□	すいへい	はらへる	うみへび
か□	かさ	かさ	かに	ほ□	ほし	ほし	ほし
注① き□(き)	きす	きく	きん	ま□	ます	まち	まる
く□	くり	くし	くし	み□	みみ	みみ	みみ
け□□	けいと	けんか	けむし	注② □□□む□	かたつむり	かぶとむし	だんごむし
こ□	こけ	こま	こし	め□□	めだか	めんこ	めだか
さ□	さる	さめ	さる	も□□□	もちつき	もっきん	もちつき
し□□□	しんぶん	しまうま	しりとり	や□	やま	やね	やぎ
す□□□	すいえい	すいせん	すずらん	ゆ□□□□	ゆうえんち	ゆうえんち	ゆわかしき
せ□□□	せんたく	せっけん	せんこう	よ□□	よっこ	よかせ	よっと
そ□	そら	そり	そる	ら□□	らくだ	らくだ	らっぱ
た□	たね	たね	たき	り□□	りんご	りんご	りんご
ち□□	ちょう	ちこく	ちくび	注② □□る	注③ こける	かえる	あひる
つ□□	つらら	つみき	つみき	れ□□	れもん	れもん	れもん
て□□□	てのひら	てつぼう	てあらい	ろ□□□	ろうそく	ろうそく	ろうそく
と□□□	となかい	とつげき	とんそく	わ□□□□	わんこそば	わんこそば	わらべうた
な□□□	なきむし	ながぐつ	なぞなぞ	注② □□を□□	ほんをよむ	みずをのむ	かみをおる
に□□□	にんじん	にっこり	にじます	注② □□ん□	べいんと	さざんか	とらんぷ
ぬ□□□□	ぬいぐるみ	ぬいぐるみ	ぬんちゃく				
ね□	ねこ	ねこ	ねこ				

注① 『ブルーナのあいうえお』では「き」であったが、「き□」の2音でのことば発見とした。

注② 『ブルーナのあいうえお』でのことば設定を基本とした。

注③ 「こける」は宮崎県の方言で「ころぶ」である。

資料6 『宮崎日日新聞』1999年6月30日

気持ち大切に言葉の交流

絵本や紙芝居、文字クイズなどを通して言葉の楽しさに触れる「語り部くらぶ」が、宮崎市田吉のはにわ会・仲間の家でスタートして約四年。宮崎女子短期大学助教授の矢口裕康さん（児童文学、民俗学）が指導する月一回の集いは、入所生の持つ言葉の世界を少しずつ広げている。「気持ち伝える楽しさを知ってほしい」と話す矢口さんが織りなす「語り」の世界を訪ねた。

（文化部・樋口由香）



宮崎市の「語り部くらぶ」
障害者ら楽しく学ぶ



一九九五年九月に始まった「語り部くらぶ」も今月で四十五回。仲間の家のメンバーのほかにスタッフ、母親、ボランティアなど約二十人が思い思いに席に着き、発声練習が始まった。「パラスール・ばらばら・ぱべびぶ・ぺばばば」。矢口さんに続いて、メンバーが一語ずつゆつくりと声をだす。一斉に大きく開かれた口から「ば」行独特の愉快な音が響いた。メンバーの大半は重複障害を持つため、言葉を伝えることが難しい。「彼らの言葉をきちんと受け止めれば、伝えることの楽しさを知ることができる」と矢口

さん。「良い聞き手」になることを念頭に置いて、言葉の交流を続けている。思いきり声を出して雰囲気なごんだ後は、一人ひとりにまつさらの紙が配られた。それぞれが「た」の付く二文字の言葉を考える連想ゲーム。「たこ」「たき」「たび」「たい」「たつ」「たけ」…。新しい言葉が飛び交う度に、歓声や笑いも聞かれる。

思いついた言葉を書いて矢口さんに差し出すと、別の一枚と交換。「ち」の付く三文字、「つ」の付く三文字と、次々に言葉を連ねていく。単語の中には「じゃんけん」「ちよき」「特番（特別番組）」「つきじ」など、発想の豊かさを表すものも多い。

こうして集まった紙切れは約二頁×約一・五頁大の白い台紙をあつという間に埋め尽くした。次の作業は平仮名で書かれた言葉への意味付け。「たこは食べるタコ、それとも上げるタコ」「たかは鳥のタカだね」など本人に確かめながら、言葉の意味を確認、全員で復唱した。

笑いと歓声に満ちた約一時間の「語り部くらぶ」。スタートした当初と比べると、メンバーの反応に大きな変化が出てきた、と矢口さんは話す。

「自分の言葉と人の言葉を受け取ることで言葉の幅が広がり、思いもつかない言葉が出てくるようになった。一人ひとりがいろんな可能性を持っている。講師と生徒の立場ではなく、同じ空間で一緒に学びたい」

同所の森富貴子代表は「生活の中に文化ののびのびするものが欲しかった。語り部くらぶが生活のアクセントになり活気が出てきた」と、「語り」の成果を振り返る。

アットホームな空間の中で出会った短い言葉の数々。その一つひとつがメンバーの胸の中でイメージを広げ、多くの「語り部」たちを生み出している。

（一九九九年六月三十日・水曜日『宮崎日日新聞』くらし 教育らん）

「語り部くらぶ」の活動に対して私の取り組み方には大原則が一つある。それは、＜障害をもっているから、こんなことをいってもわからない、という対し方をしない＞ということである。このことは、特に「仲間の家あいうえお」を具体化する際、一人ひとりの仲間ときちんと対応するという形で具現化する。その具体的な行動としては、

- ① あいうえおをB7の用紙に、一人ひとり書いてもらうのだが、その際、先ず一枚目の紙を渡す時から、各自に配る形をとっている。かつ書き終わったら、本人が私の所へもってくる形をとっている。そして、その紙に書かれている言葉を、お互いに確認し、次の言葉さがしをする紙を手渡すという形をとっている。(資料7中 注①参照)
- ② また仲間そしてスタッフ等によって導きだされた言葉を、活動の最後に参加者みんなで見つめなおすことで、それぞれの言葉発見、言葉確認をめざしているしだいである。

この「仲間の家あいうえお」の試みを、仲間達と共に具体化してゆく中で、「語り部くらぶ」の次なる方向性を模索してみたいと思っている。(資料7 「仲間の家」あかさたなはまや参照)

Ⅳ 「仲間の家あいうえお」からみえてきたもの

資料8をみてほしい。

仲間達の言葉の幅の拡がり、言葉の保有を、このような形ですべてを語れるとは思わない。しかし、私が「仲間の家あいうえお」を始める際に予想していたよりも、仲間達は言葉を保有していることが、一目でわかる。資料9のような比較が最善とは思わないが、一応、仲間達と作業所スタッフ他の「仲間の家あいうえお」の中からでてきた言葉を表の形にしてみた。資料8・9をどう評価するかは個々人の思いがあり、違うことと思う。しかし、私は、この「仲間の家あいうえお」の取り組みをとおして、参加するすべての人の言葉さがしとなり、言葉確認ともなったことは確かである。そして、仲間達は他の色々な参加者の言葉を聴くことによって言葉はさらに拡がっているようである。

資料7 「仲間の家」あかさたなはまや

実年 令	あ (1999. 3.23) 10人参加					か (1999. 4.27) 18人参加				
	⑱						かに	黄み	くさ	けむし
18						亀	霧	くり	けむし	こま
⑲	足	いも	うなぎ	えんそく	おまえ ^{注①}	かさ、かに、柿、神、亀	キス	蜘蛛	けいと	こな
⑳	赤	石	うさぎ	えんぴつ	おにく	柿	霧	くま	けいと	こま
㉑						^{注①} かさ、かに、柿、紙、亀、鴨	きず	くり	けむり	恋
△20						火事	霧	くり	けがに	こま
△22						川	黄み	くり	けむし	こな
22										
㉓										
24	朝	いぬ	うどん	えあこん	おでん	牡蠣	菊	くり	けいと	こま
△24	あり	いわ	うきわ	えきべん	おやつ					
㉖	雨	石	うしろ	えんとつ	おかし	亀	絹	くろ	けいと	琴
36						亀	肝	蜘蛛	けだま	こめ
36	雨	石	うさぎ	えんぴつ	おにく	かに、かぶ	霧	くま	けいき	鯉
36										
△36										
㉖	飴	いす	うさぎ	えんぴつ	おうむ	かさ	絹	くま	けいと	ここ
△36	足	いぬ	うちは	えんばん	おつり	菓子	きず	くつ	けばい	こん
㉗						柿	北	くり	けむし	こし
△㉙	鮎	いも	うんこ	えんぴつ	おろち	かさ	絹	楠	けんか	琴
△㉙						貝	霧	くし	けむし	こし
㉙										
△55										
△61										
△61						紙	寄附	桑	けまり	古稀
△61										
71	雨	糸	うどん	えんとつ	おやじ	かさ	木木(きぎ)	くり	けいと	こめ
他 の 参 加 者										

△はスタッフ、ボランティアを表す。数字は年齢を表し○は女性。
注①は、言葉掛けのゆき違いから生じた結果である。

実施年月日 年齢	さ (1999. 5.25) 18人参加					た (1999. 6.22) 19人参加				
⑱	さる	しまうま	すごろく	せんこう	そら	たこ	ちぢむ	つみき	てつだい	とんねる
18	さる	しまうま	すいえい	せんせい	そと	たか	近い	ついて ^{注①}	てんぷら ^{注①}	とうめい
⑲	さる	しまうま	すいえい	せんせい	そば	たき一	ちたん	つるべ	てつろう	とくばん
⑳	さる	しまうま	すば一つ	せんたく	そば	たこ	ちぢむ	つみき	てつだい	とんねる
㉑	さめ	しらすぎ	すいどう	せんろう	そば	たき一	ちたん	つるべ	てつろう	ともだち
△20	さば	しばかり	すどい	せいふく	そば	滝	チーフ(主任)	築地	てれほん	とびうお
△22	さく	しろさい	すごろく	せんこう	そら	たね	ちから	つきみ	てつぼう	と一ます
22										
23										
24	さら	しまうま	すば一	せんたく	そば	たこ	ちまき	つばき	てんぷら	とんかつ
△24										
36	さん(棧)	しんぱん	すいえい	せんざい	そら	タン(つばの)	ちまた	つくる	てつどう	とうだい
36	さる	しいたけ	すいえい	せんべい	そば	たい	ちよき	つかも	てつじん	ともだち
36	さる	ししまい	すいどう	せんせい	そと	たこ	近い	つうち	てぶる	とうめい
36										
△36	さる	しろくま	すまっぷ	せんせい	そら	凧	ちどり	つくし	てぶくろ	ともだち
36	さら	しまうま	すのもの	せいとん	そら	たち(魚)	近い	つつじ	てんぷら	とんかつ
△36	さい	ししとう	すてーじ	せんたく	そら	たけ	ち一ず	つくし	てのひら	とりのす
37	さい	しまうま	すま一と	せろり一	そと	たつ	ちくわ	つきみ	てつだい	とりがら
△51	さわ	しおさい	すなはま	せくはら	そら	旅	血のり	つばき	てぼどん	とくめい
△51	さら	ししとう	すずむし	せんたく	そり	たい	近い	つくし	てつどう	とうめい
51										
△55										
△61										
△61						滝	ちぐさ	つらら	てつきよう	とまりぎ
△61										
71	さら	しあわせ	すなやま	せろいど	そん	たけ	ちまき	つくえ	てつだい	とんかつ
他の参加者	つるべ } スタッフの名前 つかも }									

△はスタッフ、ボランティアを表す。 数字は年齢を表し○は女性。
注①は、言葉掛けのゆき違いから生じた結果である。

実施 年月日 年齢	な (1999. 7.27) 29人参加					は (1999. 9.28) 25人参加					
⑱	なわとび	にんたま	ぬいぐるみ	ねこ	いのち	花	ひだり	ふんわり	たいへん	ほし	
18	なわとび	にんじん	ぬいぐるみ	ねこ	きのみ	はは	ひひひ	ふろおけ	とうへん	ほん	
⑲	なきむし	にんにく	ぬいぐるみ	ねこ	いのち	はひ	ひーろ	ふじわら	じんべい	ほし(のごろう)	
⑳	なわとび	にんじん	ぬいぐるみ	ねこ	このみ	箸	ひよこ	ふうせん	たいへん	ほし	
㉑	なかよし	にんじん	ぬいぐるみ	ねこ	このみ	花	ひかり	ふんいき	にくへい	ほん	
△20	なるほど	にじいろ	ぬるいかぜ	ねが	このは	はげ	ひかり	ふりがな	たいへん	ほほ	
△㉒	なのはな	につぼん	ぬいぐるみ	ねこ	きのこ	花	ひるね	ふみきり	うみへび	ほし	
22											
㉓											
24	なわとび	にんじん	ぬいぐるみ	ねこ	あのこ	はこ	ひよこ	ふくろう	たいへん	ほし	
△24											
㉔	ならわし	にがごり	ぬんちゃく	ねじ	まのて	はけ	ひばち	ふれあい	ひとへや	ほし	
36	なっとう	にんげん	ぬいぐるみ	ねこ	きのこ	はね	ひとで	ふうせん	すいへい	ほん	
36	ながとも	にわとり	ぬんちゃく	ねこ	えのき	花	ひよこ	ふうりん	たいへん	ほん	
36											
△㉕	なのはな	にんじん	ぬのおくろ	ねつ	いのち	花	ひかり	ふくろう	開閉	ほし	
㉕	なまける	にんにく	ぬいぐるみ	ねつ	いのち	はま	ひより	ふうせん	へのへの	ほん	
△36	ならづけ	にんにく	ぬいぐるみ	ねつ	えのき	はれ	ひなた	ふうりん	たいへい	ほし	
㉖	なぞなぞ	にわとり	ぬいぐるみ	ねこ	きのみ	花	ひかり	ふうりん	たいへん	ほし	
△51	なわとび	にわとり	ぬいぐるみ	ねこ	あのね	はす	ひばり	ふくろう	たいへん	鉾	
△51	なのはな	にんじん	ぬんちゃく	ねこ	あのこ	花	ひがし	ふうせん	ごんべい	ほし	
51											
△55											
△61											
△61	南天	にあみす	ぬれねずみ	ねた	みのり	はぎ	ひがん	ふようど	のぎへん	ほほ	
△61											
71						箸	ひがし	ふれあい	いしべい	ほし	
夏休み中 なので参 加学生	なきべそ	にがごり	ぬいぐるみ	ねこ	きのは	△♂花	ひかり	ふうせん	たいへん	彫り	
	なかよし	にんじん	ぬおぶくろ	ねり	♂♂	はれ	ひとみ	ふうせん	しまへび	ほら	
引率教師	なまいき	にんげん		♂の母 (途中で参加やめ帰宅)	♂	橋	ひのき	ふくろう	すいへい	ほし	
	なぞなぞ	にんじゃ	ぬるいさけ	合歓		ひので	箸	ひみつ	ふたごぎ	たいへん	ほし
	ながさき	にんじん	ぬんちゃく	ねぎ	このは	♂	はも	ひもの	ふともも	のぎへん	ほし
	南せい	にせもの	ぬりぐすり	寝(ね)る	猪木	♂	橋	ひなた	ふんわり	たいへん	ほん
学 生	なないろ	にんにく	ぬいぐるみ	ねつ	いのち						
	なかよし	にわとり	ぬいぐるみ	ねつ	このは						
	なのはな	にんげん	ぬんちゃく	ねこ	いのち	♂					
	なのはな	にんじん	ぬんちゃく	ねが	このは						
	なのはな	にんじん	ぬいぐるみ	ねこ	きのこ						

△はスタッフ，ボランティアを表す。 数字は年齢を表し○は女性。

1999. 7.26 実習中の宮崎県立看護大学
学生，先生も参加
♂は男性
小中教員ニーズ講座
(ボランティア教育A)
参加者

実施 年月日 年齢	ま (1999.10.26) 15人参加					や (1999.11.16) 17人参加		
⑱	まご	みず	だんごむし	めだか	ものさし	やだ	ゆきだるま	よだれ
18	まみ(人名)	みみ	おかまむし	めだか	ももやき	やや(赤ん坊)	ゆきおんな	よっと
⑲	まだ	みき(人名)	めがねむし	めぐみ	もりかつ (もりかつゆき)	やや	ゆずえんね (CDタイトル)	よーく
⑳	まご	みず	だんごむし	めだか	ものさし	やぎ	ゆきだるま	よっと
㉑	まき	みず	どくまむし	めじろ	もののけ	やま	ゆきだるま	よっと
△20	まじ	幹	かぶとむし	めだま	もくそう	役	ゆるさない	よざん (余計 宮崎弁)
△22								
22								
23								
24	まま	みず	どくまむし		もしもし	やだ	ゆきだるま	よっと
△24								
36	舞う	みな(貝)	かたつむり	めやに	もくれん	やし	ゆうしょう	養子
36	まめ	みせ	むかむか	めぐみ	もりもり	やぎ	ゆうえんち	よっと
36	まま	みみ	かぶとむし	めがね	もりもり	やぎ	ゆきおんな	よいな
36								
△36								
36	まま	みみ	かたつむり	めだか	もうすぐ	やま	ゆきだるま	よいこ
△36	まる	みつ	さなだむし	めいろ	ももんが	やね	ゆうえんち	よっと
37	まめ	みず	かたつむり	めだか	もりもり	やし	ゆきだるま	よろい
△51						やま	ゆきだるま	よだれ
△51						薬	ゆとりすと	よっと
51								
△55								
△61								
△61								
△61								
71	まこ(人名)	みず		めだか	もりもり	やぎ	ゆきだるま	よろい
△71	まち	みず	だんごむし	めだか	ものさし	やぎ	ゆきだるま	よろい

△はスタッフ，ボランティアを表す。 数字は年齢を表し○は女性。

資料8 仲間の家ことば分類

分類 ことば	自 然	植物 (花,野菜,木他)	動物他 (魚,鳥,昆虫他)		人間に関するもの		食べもの
仲間たち* ○内数字は人数を表す	朝 雨③ 霧③ そら③ ほし⑤ みず⑥ やま②	いも 柿④ かぶ 栗⑤ しいたけ せろりー にんじん⑤ にんにく② にがごり② きのこ えのき きのみ② このみ② きのは 菊 きぎ(木木) くさ たけ つつじ つばき 花③ やし もくれん	いぬ うさぎ③ くま③ 猿⑥ さい しまうま⑦ ねこ⑩ やぎ④ うなぎ かに④ 牡蠣 鯉 さめ たこ④ たい たち(魚) めだか⑥ ひとで おうむ 鴨 しらさぎ たか ちどり	にわとり② めじろ ひよこ③ ふくろう かめ⑤ 蜘蛛② けむし④ だんごむし② どくまむし② かたつむり③ かぶとむし たつ みな(貝)	足 腰 みみ③ おやじ おまえ せんせい③ てつじん ともだち② なきむし なかよし② なまける なきべそ にんげん あのこ まご② まま③ はは やや(赤ん坊) 養子 いのち③ すまーと ねつ めやに	へのへの よだれ② すいへい *以下人名 たきー② つるぺ② つかも てつろう② まみ まこ みき もりかつ ふじわら ほし(のごろう)	飴 おかし ケーキ ちまき せんべい うどん② そば⑤ てんぷら③ とんかつ③ ももやき おでん おにく② 黄み 米② すのもの ちくわ とりがら なつとう まめ②
種 (人数)	7(23)	23(40)	36(89)		36(52)		19(31)
作業所 スタッフ・ボラン ティア他	霧② そら⑤ ほし⑦ みず 滝② つらら ぬるいかぜ みのり ひので はれ② やま	いも 栗② ししとう② にんじん④ にんにく③ ねぎ きのこ② えのき このは④ 楠 桑 たね たけ 千草 つくし③ つばき なのはな⑥ 南天 合歓 幹 みつ 花③ はす はぎ ひのき やし	いぬ 猿 さい しろさい しろくま ねこ⑤ やぎ 鮎 貝 さば たい とびうお めだか はも うみへび けがに にわとり② ひばり ふくろう③ あり けむし② すずむし かぶとむし	さなだむし だんごむし しまへび ももんが おろち	足 腰 手の平 めだま はげ ひとみ ふともも ほほ② せんせい チーフ ともだち なまいき なかよし よいこ あのこ にんげん② にんじゃ ぬれねずみ 寝る ねつ④ いのち③ ゆとりすと すいへい	すまっぶ *以下人名 猪木	おやつ 菓子 えきべん おやつ チーズ ならづけ ひもの 黄み
種 (人数)	11(24)	26(46)	28(36)		25(32)		7(7)

あそび	色	そ の 他					
こま④ すごろく つみき② ぬいぐるみ⑩ なわとび④ ぬんちゃく② すいえい④ スポーツ なぞなぞ ちよき	赤 黒	石③ いす いと うしろ えんそく えんびつ③ えあこん えんとつ② 傘⑤ 神 紙 キス きず 絹② 肝 北 稽古 けいと⑤ けむり けだま 粉 恋 琴	ここ さら③ 棧 しんばん ししまい しあわせ すいどう② すーぱー すなやま せんこう せんたく② せんろう(線路) せんざい せいとん セロイド そと③ 損 タン ちぢむ② 近い③ ちたん② ちまた ついて	つくる つうち 月見 てつだい④ てっちう(鉄柱) てつどう てーぶる とんねる② とうめい② 特番 とうだい ならわし にんたま ぬかぶくろ ねじ 煉り 魔のて まだ まき 舞う みせ おかまむし めがねむし	むかむか 恵み② めがね ものさし② もののけ もしもし もりもり④ もうすぐ はひ 箸② はこ はけ はね はま ひだり ひひひ ひーろ ひかり② ひばち ひより ひがし ふんわり ふろおけ	ふうせん③ ふんいき ふれあい② ふうりん② たいへん⑤ とうへん じんべい にくへい ひとへや いしべい ほん⑤ やだ② やや やね ゆきだるま⑥ ゆきおんな② ゆずえんね (CDタイトル) ゆうしょう ゆうえんち② よっと⑥ よーく よいな	よろい
10(30)	2(2)	115(175)					
毛まり こま 凧 すごろく ぬいぐるみ⑥ なわとび ぬんちゃく④ うきわ てっぽう なぞなぞ	紺 七色 虹色	岩 うちわ うんこ えんばん えんびつ おつり 火事 かわ 紙 きず 絹 寄附 くつ くし けばい けんか 粉 琴 古稀 柵 沢 さら しばかり	しおさい するどい すてーじ すなはま せいふく せんこう せんたく② セクハラ そり 旅 ちから 血のり 近い 築地 月見 つくえ てれほん てぶくろ てぼどん てつどう てつきょう とーます とりのす	とくめい とうめい とまりぎ なるほど 長崎 南(なん)せい にっぽん ニアミス にせもの ぬのぶくろ ぬるいさけ ぬりぐすり ネガ② ネタ あのね まじ まる まち めいろ もくそう ものさし 橋② 箸	ひかり③ ひるね ひなた② ひがし 彼岸 ひみつ ふりがな ふみきり ふうりん ふうせん③ 腐葉土 ふたごぎ ふんわり たいへん⑤ 開閉 泰平 ごんべい のぎへん② 鉾 彫り ほら 役 薬(やく)	ゆるさない ゆきだるま③ よざん(宮崎弁・余計) よろい② よっと	
10(18)	3(3)	97(113)					

資料9 ことば色々

種類 参加者	自然	植物他	動物他	人間に関係 するもの	食べもの	あそび	色	その他	種類 (のべ人数)
仲間たち	7 (23)	23 (40)	36 (89)	36 (52)	19 (31)	10 (30)	2 (2)	115 (175)	248 (442)
スタッフ他	11 (24)	26 (46)	28 (36)	25 (32)	7 (7)	10 (18)	3 (3)	97 (113)	207 (279)

今まで、さまざまな模索を経ての「仲間の家あいうえお」の試みであるが、現在、11月段階でや行まで到達した。ということは来年一月には、「仲間の家あいうえお」はわ行まで辿りつくことになる。これらの過程を経て、仲間の家の仲間達、スタッフ等と共に、聴く・語るという行為を基本として、言葉さがしの旅を続けたいと思っている。

V 「語り部くらぶ」の今後

1995年の調査で、全国の知的障害者は41万3千人いると報告されている。うち施設入所者が11万6千人、そして在宅者が29万7千人である。ということは在宅の知的障害者が18万1千人多く、少なくとも自分の家を居住の基本にしている人が多いことがわかる。施設を一概に悪いとは思わないが、地域に暮らしてゆくということを追求してゆくと、在宅ということにもなる。

仲間の家へと通う仲間も、在宅者である。しかし1997年11月1日より新たな試みとして、グループホーム「メロディ」という形が出現した。宮崎市の支援もあつてのグループホーム誕生である。福祉先進国フィンランドでは、法律で、知的障害者へのサービスは、自治体が自治体組合を結成して取り組むように定められているため、複数の自治体による組合によって運営されている。この運営方法は、個々の自治体では、対象となる障害者の数が少なく、効率的なサービスができないとの考えによる。わが国でも、一市町村による何かという取り組みではなく、多角的広域的な視点をもりこむと、また違ったグループホームの出現も生まれてくるのではないだろうか。

また松本了（全日本手をつなぐ理事会常務理事）は、厚生省の施設中心から在宅中心への転換という施策に対して、次のような指摘をしている。「当然進むべき方向でしょう。しかし日本では、在宅という言葉に誤解があります。親の家にずっといるという意味で考えられている。そうではなく、ケアつき住宅とかグループホームで自立して生活できるような環境を整えた上での在宅でなければならない」との発言、かみしめたいものである。

そして子ども時代に、障害のある人もない人もとの共生意識創りも求められてこよう。自分の住んでいる地域に、色々な人が住んでいる自然な姿ということであれば、私の取り組んでいる「語り部くらぶ」のもつ意味も、さらに意義をもってくるように思うのである。一つ言葉の勉強会語り部くらぶでなく、私達をとりまく環境構成も、同時進行で変身してゆくことによつての、共生社会をめざしたいものである。

その環境構成の一つとして、幼稚園教育での、さらなる統合教育の推進がなされようとしていることも注目に値する。幼稚園では平成12年4月1日から、新『幼稚園教育要領』にもとづいて教育

資料10 あいうえお作品と仲間の家

書名他	行																						
	あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に	ぬ
『ブルーナのあいうえお』 昭和五十年十月十二日講談社刊 出版企画・絵デイック・ブルーナ 企画・構成トリア	あめ	いす	うさぎ	えんぴつ	おうむ	かさ	き	くつ	けむり	こま	さる	しまうま	すけーと	せーたー	そり	たこ	ちよう	つくえ	てっぼう	とらつく	なわとび	にわとり	ぬいぐるみ
	(雨)○		○	○		(傘)○		○	○	○	○	○			○	(凧)○			○		○	○	○
『はじめてのあいうえお』 ま社刊 一九九三年四月一五日グランドま 土田義晴作	あひる	いぬ	うさぎ	えび	おかあさん	かんがるー	きんぎょ	くれよん	けーき	こま	さんりんしゃ	しんごう	すいか	せみ	そらまめ	たんぼぼ	ちゅうりつぷ	つくし	てるてるぼうず	とうもろこし	なす	にわとり	ぬりえ
		○	○								○							○				○	
書名他	行																						
	ね	の	は	ひ	ふ	へ	ほ	ま	み	む	め	も	や	ゆ	よ	ら	り	る	れ	ろ	わ	を	ん
『ブルーナのあいうえお』 昭和五十年十月十二日講談社刊 出版企画・絵デイック・ブルーナ 企画・構成トリア	ねこ	きのこ	はち	ひつじ	ふうせん	すいへい	ほし	まど	みず	かたつむり	めがね	もっさん	やね	ゆきだるま	よつと	らつぱ	りんご	かえる	れもん	ろうそく	わんぴーす	ほんをよむ	ぶらんこ
	○	○			○	○	○			○	○	○	○	○	○								
『はじめてのあいうえお』 ま社刊 一九九三年四月一五日グランドま 土田義晴作	ねこ	のりまき	はなび	ひこうき	ふうせん	へび	ほつとけーき	まど	みかん	むしめがね	めりーごーらんど	もも	やぎ	ゆきだるま	よつと	らつこ	りぼん	るびー	れいぞうこ	ろぼつと	わに		おじいさん・おばあさん
	○				○								○	○	○								
「仲間の家あいうえお」でもでてきた言葉																							

④1999年11月や行までのものである。

がおこなわれる。その「第3章 指導計画作成上の留意事項 2. 特に留意する事項」中に、次のような一文がみられる。

「(2)障害のある幼児の指導に当たっては、家庭及び専門機関との連携を図りながら、集団の中で生活することを通して全体的な発達を促すとともに、障害の種類、程度に応じて適切に配慮すること」そして

「(3)幼児の社会性や豊かな人間性をはぐくむため、地域や幼稚園の実態等により、盲学校、聾学校、養護学校等の障害のある幼児との交流の機会を積極的に設けるよう配慮すること」としている。このうよな子ども時代から共生社会を具体化してゆく中で、仲間の家をとりまく環境構成のさらなる変身を期待しての「語り部くらぶ」への取り組みもつづけてゆきたいと思っている。

そして、仲間の家の中の活動とのかかわりの中では、三つのキーワードを考えている。仲間を家の日常活動、ふれあい喫茶あいあい、グループホーム・メロディ等も活かして

さらなる「自律」をめざして

自分で生活する「自活」もめざして

そのためには、「自信」をもって、自分の言葉を獲得する。

ことをめざして、今後の活動をもと思っている。「語り部くらぶ」の活動も仲間の家にとっての私の三つのキーワード<自律 自活 自信>をささえることのできる一助となるよう取り組んでゆきたい。

[1999年11月30日 受理]